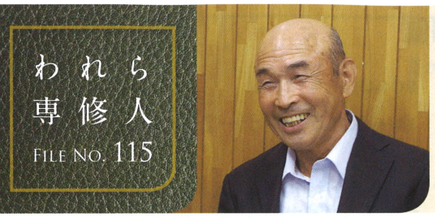

水産は石巻の基幹産業。魚が大事な食としてある限り、地道に被災を乗り越えていく。

北條卓夫さんは県立石巻高校水泳部時代、専修大学からスカウトされた同級生とともに上京を決意。卒業後、地元・石巻で水産業に従事しながら、1989（平成元）年に開学した石巻専修大学の誘致をはじめ、東日本大震災後の復興活動など、地域発展に大きく関わっています。

水泳が縁で、故郷・石巻から上京して専修大学へ入学

専修大学へは、高校（宮城県立石巻高等学校）の水泳部の同期４人そろって仲良く進学しました。部としても強かったのですが、同期に岩渕祥次（昭38・商経経）や、そして青木洋一（昭38・商経経）というバタフライの東北チャンピオンがおりまして、彼のところに専修大の勧誘がきたんですね。私はそれに便乗して大学に入ったようなものです（笑）。私は２年生からマネジャーに専念しましたが、青木は学生選手権で入賞して、川島記念賞も受賞するぐらい、大学でも活躍しましたね。

卒業後は長崎屋に６年ほど勤めましたが、長男ということもあり、1969年に地元に戻って石巻水産（現・木の屋石巻水産）に入社しました。その後、シンヨー水産の創業者に誘われて、1983年の会社設立から参画。ベーリング海などの北方漁場で水産会社の船が獲ってきた魚を仕入れ、地元の水産加工業者さんに卸す事業に32年間携わってきました。その間、「200海里問題」や「リーマンショック」など、厳しい時期も経験しました。特に東日本大震災は大きく、魚市場背後地に比べたら津波の建物の被害は少なかったものの、他所冷蔵庫の預り商品の被害総額は１億5,000万円にのぼりました。水産加工業者の多くが廃業したり、風評被害もあったりと、まだまだ厳しい状況が続いていますが、日本人が魚を食べている限り「魚屋」の仕事はなくならない。今まで通り地道に誠実にやっていけば、必ず乗り越えられると考えています。

石巻への母校誘致に尽力。震災を機に、市民と大学の距離が縮まる

石巻専修大学の誘致の際は偶然、高校水泳部の同期の一人、阿部進（昭38・商経経、故人）が評議員をやっていたこともあり、地域情報の提供や誘致予定地の案内、設置事務局として現地入りした大学スタッフのサポートなど、友人として校友としてお手伝いしました。当初は反対の声も強く、飲み屋で反対論をぶっている連中を見かねて、「この野郎、俺は専修大だぞ」なんて口論になることもありましたね（笑）。

私自身、「宮城県第２の都市に大学のひとつぐらいなければおかしい」という気持ちが強かったので、森口忠造総長（当時）の情熱が実って、市民が母校の誘致を受け入れてくれたときは嬉しかったですね。

そんな関係もあり、震災後は石巻専修大学の「復興大学」※の活動にも関わってきました。復興大学は、宮城県内の国公私立19大学などでつくる「学都仙台コンソーシアム」の事業のひとつ。地域の大学が核となって、市民や企業の皆さんに復興支援サービスをワンストップで提供するというものです。

北條卓夫さん

シンヨー水産株式会社　取締役 相談役

ほうじょう　たくお●1941（昭和16）年、宮城県生まれ。1963（昭和38）年、商経学部経済学科卒業。長崎屋勤務を経て帰郷し石巻水産に入社。水産加工会社シンヨー水産の立ち上げに参画、同社長・会長を歴任後、現在取締役 相談役。東日本大震災後は業務の傍ら、被災地域・企業の復旧・復興を学生らとともに推進する「復興大学」コーディネーターとして、地元水産業の支援を中心に活動している。

石巻市流留（ながる）地区にあるシンヨー水産の外観

チーフコーディネーターとしての私の役割は、水産会社の悩みと大学の専門研究のマッチング。例えば、大学の研究室と牡蠣の養殖業者が組んで、ノロウィルスや貝毒の問題の解決をはかる取り組みなどが始まっています。大震災から４年近くが経ち、地域の課題も少しずつ変わってきています。長く水産業に携わってきたので人脈だけはありますから、引き続き協力していきたいと考えています。

こうした活動を通じて感じるのは、震災を機に市民と大学との距離が一気に縮まったということです。震災前はまだ「大学は敷居が高いところ」という感覚が市民の間にはありましたが、被災者の受け入れなどの大学側の対応でその思いは一変しました。今後ますます距離が縮まり、石巻専修大学が「わが市の大学」として存在感を増していくことを、校友の一人として願っています。（談）

シンヨー水産　復興大学　検索

復興大学では、産学官連携のための企業間コーディネーターを担当。「細かい仕事ですが、地域が元気を取り戻すために必要なことです」

※平成26年度大学改革推進等補助金（大学等における地域復興のためのセンター的機能整備事業・文部科学省）により実施（2015年度で終了）。

復興には「教育」が不可欠。地域を支える人材の育成に少しでも貢献していきたい。

石巻専修大学の一期生として同校に入学した伊東さん。学習塾を経営しながら、日々子供たちの教育に真摯に向き合っています。東日本大震災を経験した彼が考える「復興」のあり方と、母校への恩返しの気持ちについてうかがいました。

子どもたちに「学ぶ楽しさ」を。25年間、その思いで塾を経営

学習塾の仕事を始めたのは大学2年のとき。両親の負担を減らすために「生活費は自分で稼ぐ」とアルバイトを始め、そのまま在学中に会社を興しました。

勉強ができる子をもっと伸ばすことも大切ですが、勉強の仕方がわからずにドロップアウトしてしまう子たちに、学ぶことの面白さ・楽しさを知ってもらうきっかけづくりをしたい。その思いで25年間続けています。

私は石巻専修大学の一期生。大学と一緒に、街の人たちに育ててもらったという思いが強いです。だから、卒業後も大学や街が成長していく過程をそばで見守りながら、何かしら貢献できればという気持ちはずっと持っていますね。

震災を経験した今、特に感じていることは、地域の復興という大きな課題を解決していく時に、最後に行き着くのは「教育」だということ。「地域がどうやって人材を育てていくのか」は大きなテーマです。石巻には専修大学という素晴らしい学校があるので、地域を支える人材を生み出せる環境があるわけです。大学と行政が両輪となって、地域の力になっていかないといけません。そして、私自身も微力ながらそのためのお手伝いができればいいなと思っているんです。

震災を機に生まれた浦和学院高校との交流

震災後のエピソードとして、埼玉県の浦和学院高校との交流があります。専修大学を通じて「被災地に救援物資を届けたいが、どうしたらいいか」と相談を受けたのがきっかけです。震災直後で教えられる道路もなく、現場も混乱している。そこで私が仲介し、一緒に避難所を回って物資を届けることにしました。以来、毎月一回は石巻を訪れてくれています。

そんな縁から、一昨年の春の甲子園で同校が決勝戦に進んだ際、「石巻の方々にも応援に来てもらいたい」と声を掛けてもらいました。40人の応援団を結成し、甲子園のアルプス席へ。子どもたちが野球部のために作った大きな横断幕は、実際に飾ってもらったんですよ。そして優勝、ドラマのようでした。

こうした交流は、専修大学があったからこそ実現したわけですが、大学は一切言わないですよね。もう少しPRしてほしいと思います（笑）。

復興大学に関わることになったのも、このような活動の流れから。坂田隆学長から声をかけてもらい、北條さんや大山勝大さん（昭42・法律・石巻支部顧問）達と一緒にコーディネーターとして活動しています。

個人的には、復興というものには終わりがないと思っています。自然災害は誰にでも起こり得るもの。だから、長い人生で考えた時に特別なことではないのかもしれません。できることは、先に体験した者として伝えていくこと。そういう気持ちで考えていけば、一歩でも前に進んでいけると思っています。

（談）

伊東孝浩さん

伊東義塾　代表

いとう　たかひろ●1969（昭和44）年、宮城県生まれ。石巻専修大学に一期生として入学し、2年時に現在代表を務める学習塾「伊東義塾」を立ち上げる。1993（平成5）年、経営学部経営学科卒業。1995（平成7）年、同大学院経営学研究科修士課程卒業。専修大学校友会副会長、石巻専修大学同窓会長も務めている。

現在、伊東義塾では小・中学生を中心に約20人の生徒が学んでいる

復興大学では、伊東さんは「中小企業・防災・まちづくり支援」を担当

＼伊東さんが仲間と運営するFacebook／

石巻専修大学・The Press　検索

https://ja-jp.facebook.com/IshinomakiSenshuThePress